

今市地区“まちづくり懇話会”会議録

日時：平成 29 年 6 月 24 日(土) 10:00～正午

場所：日光市役所本庁舎 正庁

次第：1 開会 地域振興課長

2 挨拶 日光市長 斎藤文夫

3 内容 (1) まちづくり懇話会とは

(2) テーマ「高齢者等交流促進の場づくり」について

(3) 意見交換

4 その他

5 閉会

《意見交換内容》

参加者：今市地区のまちづくり懇話会について、先日このテーマを決めるときに、高齢者等交流促進の場づくりについてというテーマになりましたが、私のイメージからこの高齢者というのはどういう高齢者を想像しているのでしょうかということからお話させていただきますと、やはり介護認定を受けない元気な高齢者という認識で参加させていただいております。地域包括ケアシステムのご説明をいただきましたけれども、このシステムは要介護1、要介護2、要支援1、要支援2の方が相談に行くところではなくて、元気な高齢者のための居場所づくりなんかもやっているところなのだなあと、勉強不足で初めて知った次第でございます。質問はたくさんあるので後ほど個人的にお聞きしに行くとして、私が考えていることは、元気な高齢者が今たくさんいるのです。団塊の世代の方が退職し私の周りにもたくさんいまして、家にいると一日誰とも口を利かずに過ごしていたという話も聞きます。オアシス支援事業という素晴らしいものがございます。そこに行きたいのだけれど一日行くと1,200円掛かるので、とても年金暮らしでは賄えないとか、もっと行きたいのだけれどという話もお聞きしております。今から自分もそういう年齢に入っていくにつれて、どうしたらいいのだろうと思います。やはり高齢者が高齢者を支えるような社会、そういうものをつくっていかねばならないのだと思うのです。私も社会教育委員を長くやらせていただいて、教育委員会でとても素晴らしい社会教育の生涯学習についてアンケートを取ったことがありました。その中で自分の知識とか技量、得意なことを社会のために活かしたいけれども、そのすべがわからないという人が大変多いことがわかっております。高齢者問題は福祉ということの垣根をとっばらって、教育委員会とかと提携してまちづくりとして考えていただけないかということ、今日はお願いにまいりました。自分たちがどこまでできるのか、行政にどこまでやっていただきたいかということも、自分なりに勉強して考えてきましたが、まず大きなくくりとして教育委員会も杉並木大学校をやっています。この間の市議会の質問でお答えいただいて、杉並木大学校の受講生の数を増やして下さるという本当に素晴らしい回答をいただきましたが、そうではなくてそこまで行けなくても学びたいとか、どこか集まる場所があればいいなと思っている方がたくさんいるので、

生涯現役応援ということをテーマに、教育委員会も福祉のほうと協力してやっていただきたいと思うのです。本当に元気な高齢者が多いです。高齢者は自由です。時間もたくさんあるから、そういう方が欲望を持てるような日光市になればいいと思うのです。外出して社会参加をして、ここの説明にもありましたけれども、その中で高齢者だって人に役に立つ喜びというのを味わえるのです。今日の懇話会でサロンだという市長のとても素敵なお話を伺って勇気がわいたのですが、元気な高齢者のためのサロン、元気な高齢者が自分で運営することもできると思うので、その第一歩を市のほうにお願いしたいと思いました。

健康福祉部長：貴重なご意見ありがとうございます。このオアシス支援事業の費用負担の話というのは、実際安くするというのは今すぐ言える話ではないのですが、1つは随分時間が経って、事業所によってやはり内容もばらつきがあるということは事実だと思いますので、非常に効果が大きいところもあれば、そうではないところもあったりして、生きがいつくりみたいなことをもっと充実させるのに、この仕組みをどう変えていったらいいとか、そういったことはご提案にありましたとおり、教育委員会のほうとよく話し合いながら、全体的な話として考えていきたいと思っています。それともう1点ですが、オアシス支援事業の仕組みというのは、どうしても小学校区に1つということでやっておりますので、先ほど高齢福祉課のほうから説明した生活支援体制整備事業で、各自治会単位のサロン、居場所づくりみたいなことも取り組んでいただいております、今市地区でもいくつかできていると伺っていますが、そういったものも併せていろいろな仕組みがあってもいいのかなと思っていますので、その辺は全体として考えていきたいと思っています。

市長：高齢者の方が、自分が持っている能力を活かしたいという欲求があっても、活かす場所や方法がわからない状況があるということ、また、福祉の分野だけではなく、まちづくりとして一体的に捉えて欲しいというご意見でありますので、これは教育委員会の話が出されましたが、生涯学習等と絡めた中で高齢者の能力を活かすものについて、教育次長からお願いします。

教育次長：公民館講座といってしまうと少し固い部分がありますが、現在の高齢者向けといえますか、そういうものは年間90回程度の講座をしております。ただ、やはり気軽に出向いて何かやりたいということでは、公民館では遠いというようなご意見があるというところも聞いております。福祉のほうと連携させていただいて、その地域に合った講座というものが仕組みとしてできるのか、それは制度から見直さないといけないのかなということですので、課題とさせていただきたいと思っています。

教育長：私の視点は子供のほうから考えておりますので、元気な高齢者の方々に各学校にいろいろ協力していただいております。そのようなものも1つの場かなと思っていますので、そういったところを充実させていきたいと考えています。

参加者：教育長から学校支援ボランティアの話がありましたが、それは本当に素晴らしく確立されていて、多くの方が参加されています。学校だけではなく、高齢者が高齢者の生きがいをつくる支援ボランティアというのを、また新しくつくっていただければなと思っていて、自分でつくれないかといういろいろ動いてみたのですが、やはり個人の力ではなかなか難しいのです。教育長から学校支援ボランティアのお話が出ましたので、それが今回福祉を絡めたまちづくり支援ボランティアというか、高齢者の生きがいづくり支援ボランティアというのか分かりませんが、そんな風なことでも人材を集めて登録制度にして、活躍の場をつくっていただければなと思っております。

市長：もう1つあったのが、サロンについて、市としてどういうことができるのか、また皆さんがどういうことができるのかという話で、事前に皆様方に出していただいたアンケートを一通り読ませていただきましたところ、自治公民館を利用したり、個人の家や空き家を利用するとか、色々な意見をいただいております、いつでも行ってそこでお茶飲み話ができたり、サロンのものを市としてやれるのかどうか、その辺はすでにやっている事業もありますが、もっと数を増やすということが1つと、やはり歩いて行けるような場所でないとなかなか行けないというご意見をいただきました。

地域振興部長：やはり場の提供というのは非常に大事なことなのですが、中山間地域の高齢化が進み、そこにお住いの高齢者の方は、なかなか家から出られない、出たがらない場合が多いといえます。その辺をどう外に出させるかという課題もあって、ちょっと視点がずれてしまうかもしれませんが、今、買い物ツアーと銘打った事業を行っています。これは、実は生活物資を購入することが主たる目的ではなく、とにかくひきこもりがちな高齢者の方を少し外に引っ張り出して、その移動の車中でサロンのお話ができるのかなと、そんな目的をもって取り組んでおります。その他近い場所というと、各自治公民館にお集まりいただき、巡回相談をさせてもらったり、その中に健康教室を含めたりといった取り組みも実施しています。また、市民活動支援センターをご存知かと思うのですが、そちらも市内104の市民団体の皆さんが様々なボランティア活動をしております。そういった方たちは自ら活躍の場を見出しているのですが、実は来て欲しい側からのお願いとか仕掛けということが、中々団体に届いていないところでもあるため、その辺のマッチングなども考えてみたいと思っております。

市長：考えているということですから、本日の懇話会は次の政策に活かすというのが目的なものですから、おそらく今日の話の中からどういうものが市として実施でき、また皆さんにどんなお手伝いをさせていただくか、そのようなものを模索していきたいと思っております。

参加者：市長、サロンの命名ありがとうございます。現在、今市地区社会福祉協議会の重点事業として、各自治会が主体となって、高齢者等が無理なく気軽に集う交流の場いわゆるサロン会づくりを推進しておりますが、活動が限定されまして、現在、今市地区39自治会の中で、

活動しているのが12、13くらいの町内なのです。それをもっと進めたいということであり
ます。町内によっては、サロン会等の規約をきちんとつくって運営をしたり、福祉部等
をつくってきちんと運営している自治会等もあるのです。今後、サロンをより一層充実、進
展するためには、単位自治会さらには複数の自治会を主体として、交流の場というかサロ
ン会づくりを進めるために、是非お願いなのですが、日光市と日光市社会福祉協議会、そ
れから今市地区社会福祉協議会等で構成する組織をつくって議論していただいて、サロ
ンのマニュアル的なものをつくったほうがより推進できるのではないかと思います。そんな
ことを今思っておりますので、ぜひご指導していただければと思いますので、よろしくお
願いします。

健康福祉部長：今、社会福祉協議会のほうを中心に生活支援体制整備事業として、いろいろお話を
していただいていることだと思います。今のご意見まさしくそのとおりでと思うのですが、
この事業は市のほうから社会福祉協議会に委託している部分もあるので、本来一緒にやっ
ている事業なのですが、どうしても今までのところ社会福祉協議会のほうに、任せていた
部分が多すぎたというのが現実的にありますので、市ももっと積極的に関わって、一緒に
協議したり検討していくような体制を今後とっていきたいと思います。

市 長：私も会長をやっておりますので、市と社会福祉協議会のバランスといたしますか、その中に
また地区社会福祉協議会が入ってきますので、先ほど交流の場サロンという話がありまし
たが、モデル的なものでもできればいいかなと思っております。

参加者：高齢者交流促進の場づくりについてということ考えたときに、どのように自分たち住民
が、地域を巻き込んで活動すればいいのかなと、それと住民の方が賛同できるものは何だ
ろうなということ考えたのですが、高齢者の方がスーパーでの買い物とかそういうもの
で行くのに、運転免許証を返納すると買い物が負担になってきたということで、以前はプ
ラチナホームで買い物支援というか活動支援するような場所があったと思うのですが、そ
こがなぜ中途半端になってしまったのかなと思います。市民がどういうふうに支援できる
かということを考えてもらいたいなと思いました。

市 長：プラチナホームは、当初、国の助成があって始まった事業なのです。それは多分何年か
終わってしまって、それと合わせてそのあといくらか市単独ではやっていましたけれども、
いつのまにか、じり貧になってしまったということでもあります。当時を知っているのは、
私と副市長ぐらいです。その機能と同じようなものがあったほうがよろしいのではない
かというご意見でしょうか。

参加者：住民の方が、それに対してお手伝いできないかなあと思うのです。地域の方が、それに代
わるような仕組みをどうしたらつくれるかということなのですが、賛同を得るのは住民の
方も難しいと思うのです。

市長：立ち上げるにはどうしたらいいかということと、そこに市はどんなことを支援できるのかということですね。

副市長：以前高齢化率が50%を越えるような集落で、限界集落ということが少し課題になりました。その限界集落というきわどい言葉は使わないで、日光市の場合には高齢化集落という呼び名で、その地域の高齢者を中心にどのように支えようかという検討をいたしました。その中でも買い物というのは、非常に大きなウエイトを占めておりました。地域のお店のカタログ通販みたいなものとか、宅配システムとかを検討した経緯がありますので、ヒントはその高齢化集落対策の中にあると思います。それが町の中でどう応用できるかということだろうと思いますので、ベースはできていますので、その地域に合うような展開の仕方を模索していきたいと思います。

参加者：買い物を含めた、高齢者の足の確保というお話があったと思うのですが、基本的に私が考えているのは、やはりトータルで支援する体制というのが必要なのではないかと考えています。栄町を含めた南部地区は、デマンドタクシーをやっています。これはいわゆる交通弱者を含めた、地域の足の確保ということでやっておりますが、やはり利用者を見ると通院と買い物がとても多いです。この2つで70%くらいになると思います。何より私が言いたいのは、デマンドタクシーのことについてで、足の確保ということになるので今日のテーマと違うかもしれないのですが、生活支援の1つとして足の確保として、この事業を位置づけるべきではないかなというふうに私は思っています。宇都宮市の篠井地区もデマンドタクシーをやっています。栄町の周辺のスーパーに、デマンドタクシーが乗り付けて、買い物をして荷物を持ってまたタクシーで帰るのです。こういう事業をデマンドタクシーがやっています。生活を支援するための1つの手段かなと思っていますので、その辺のことを頭に置いていただければいいなと思っています。高齢者対策というのはやはりまちづくりなのだと思うのです。ここを基本にすれば、いろいろな意味でのコミュニティづくりが進むと思っています。高齢者というのは、切り口の1つだと思っていますので、この事業を進めることによって地域のコミュニティというのででき上がってくるだろうというふうに私は思っています。ただ、実際問題どうやってやるというのは難しいところなので、皆さんのいろいろな意見を聞きながら、私も参考までにやっていきたいなというふうに思っています。もう1つ言うと、地域ケアシステムはよくできていると思います。それぞれの状態に応じた施策体系ができていると思います。そうすると、これ以外に何が必要かということをおこの場で議論すべきなのだろうと思います。今までの話の中で少しヒントが出ていますが、サロンだとか、地域でどういうふうに進めるかとか、そういうことなのだろうと思います。高齢者等の交流促進の場づくりは、非常に難しいテーマだなとは思っていたのですが、その難しいテーマを進めるにあたって、ターゲットを絞ったほうがいいのではないかなと思います。先ほど元気な方のお話が出ましたが、介護保険を使う、介護保険一歩手前の人の施策もできている、あるいはオアシス事業みたいなものもできている

ということになると、残りは何をやるのだろうと、その中で、交流の場づくりというヒントみたいな、あるいは方向づけみたいなのが私は出てくるのだろうと思っていますので、できれば基本が熟してから、どういうものをターゲットにするかという議論に入っていたければありがたいなと思います。

市長：生活支援としての足の確保ということで、南部地区のデマンドタクシーの話が出ましたけれども、今、市が取り組んでいることと、多分この買い物であるとか病院であるとかの生活支援の足の確保は、公共交通の仕組みの中で、市としても結論づけていかなければならないと思うのです。今年度中には、その辺の計画を策定することとしております。

市民生活部長：私どもは公共交通という立場で考えてはおりますけれども、結局は先ほどおっしゃられたとおりに、交通弱者と言いますか、特に高齢者の方の足というところはかなり重点が置かれてきています。一口に公共交通というと、そこにいわゆる高齢者、福祉的な観点が非常に大きいウエイトを占めるということでありまして、一朝一夕に解決するというのはなかなか難しいと思っています。ただ、今市南部の取り組みのように、地域の力というのも必要かなと思います。日光市全体で同一的な考え方というのは、少し難しいところがあるのかなと思います。市は、基本線は当然考えてはいきますが、その支線という部分はやはり地域の皆さんの力、ご意見などに合わせたかたちでやっていかなければならないのかなというところを感じておりまして、それがどの辺までまとまった考え方を示せるかというのは今わかりませんが、大きな考え方としてはそんなところかなというふうに感じております。

市長：ケアシステムについて、最終的にまだカバーできない残ったものという意見がありましたけれども、そういったものは何かありますか。

健康福祉部長：地域包括ケアシステムの概念の話になってしまうので、恐縮なのですが、この概念図で出ておりますとおり、病気になった医療、介護が必要になったら介護こういった専門職の部分に対象になる人もいるけど、そうではない元気な方ということで、この下の部分にいつまでも元気に暮らす生活支援、介護予防というこの部分があって、この中で例えば、生活支援体制整備でサロンの設置とかそういったことを協議していただくのもこの部分の事業なのです。対象にしているのは、元気な住民の方が生きがいを持って生活できるまちづくりをしていくというのが、この事業全体ですので、対象としてはみんな入るという認識なのです。隙間ができて対象とならない人がもし出るのであれば、そこに対してまた手立てを考えます。それが課題になって、それに対してどうするというのを考える仕組みになっているのだなというふうに認識しておりますので、交通の問題もそうなのですが、それぞれの問題を地域の住民の方はどんなことが課題なのか、それに対してどんなことができるということを話し合ってくださいと認識しておりますので、そういった中で解決策も考えていくというふうな仕組みでありますので、それをうまく使っていきたいと思

っております。

市長：あと最後にサロン、交流の場所であるとか居場所であるとかそういう中で、あまり広げるのではなくて対象を絞って取り組んだほうが現実的だということをお話されたのでしょうか。

参加者：先ほど言いましたように、私は、このテーマは非常に難しいと思っています。私は自治会長をやっておりますが、私自身自治会の実状を知らないのです。本当はそこから知ることがスタートなのだと思います。正直言って、132世帯のうち50世帯くらいが、75才以上の方がいる世帯です。その世帯の高齢者がどういう状況になっているのかというのはわかりません。非常に活動的な方もいますし、引きこもっている方もいるわけです。どういう人を対象にした施策をやればいいのか。引きこもりの人はどんなことをやっても出てこないの、それを引っ張り出すのかどうか。そういう意味で、このテーマは非常に難しいなというのが1つと、ここにも書いてあるように、介護保険の施策は大体できています。それから要支援関係の方の施策もできていると思いますので、そうするとこの場で議論するというのは、健康福祉部長がおっしゃったようなところなのかなと感じています。ただ、これはもう少し議論が進んでから方向付けしたほうがいいかなと思ったので、先ほどのような話をしたのです。だから、私自身はこうだよというのは、ある意味では持っているようで持っていないのです。

参加者：皆さんが出したようなことなのですが、高齢者の年齢というのには関係はしないのですが、誰もが長生きをしたいということだと思うのです。というのは医療機関等の世話にならないで長生きをするということになりますと、やはり頭を使ったり、手足を動かしたり、会話をするということが重要になってくるのではないかなと思うのです。その中で公民館等を利用したそういったサロン形式でやりたいなとは思っておりますが、まずはそのやり方と、地域の人たちがそこに参画してくれるかどうかということが問題になってくると思うのです。そういうところを少しずつクリアするには、やはりそういったことについて指導するような立場の人たちをつくる、要請するということも必要になってくると思います。これは自治会独自ではできませんので、市のお世話になったりいろいろな機関のお世話にならないとできないことなのですが、いずれにしましても、そういう人たちを要請しながら、そういう人たちが地域を引っ張っていけるようなことをやっていただけるということが第一点で、重要だと思うのです。そこを私は意見を持っておりませんので、皆さんのご意見を聞きながらやっていきたいなとは思っています。先ほどから少しずついろいろなことが出て解決策にはなっているのかなと思いますが、そこら辺を検討していただいて、市がやるべきこと、自治会がやるべきこと自治会の人たちがやるべきことというふうに分けますと、そういう人たちを含めて誰もが自由に参加しやすい場をつくるということが必要なのかなと思っています。

市長：今後自治公民館を使ってサロンをやっていきたいということで、何かこの点に関してご意見ありますか

参加者：私は民生委員ですので、高齢者と関わる時が多いのですが、その活動の中で感じたことをお話をさせていただきます。高齢者といっても65歳から90歳代くらいまで、私の担当する地区にはいらっしゃるのですが、積極的に何事でも行動できる高齢者は、何でも参加して行動範囲が広いのです。一方、家の中に閉じこもりがちな高齢者を見ますと、いかに参加させるにはどうしたらいいかなと感じます。その人たちに話をしますと、すごく話をしたい、家に来てもらうとすごく嬉しいということなので、決して外に出たがらないわけではないのです。出たいのですが、不安があるのか団体の場には出ないという方がかなりいますので、少人数でもいいのでちょっとしたサークルが、近所同士で話ができる場があれば、一回出てみて自分のためになるな、楽しかったなと感じれば、意外と出てくるのではないかなと思っています。やはり先ほど市長もおっしゃられたかと思うのですが、とにかく足がない、もちろん車も運転できませんので、5、6分程度の間だったら歩けるので、身近な公民館あたりを利用したら、かなり効果が表れるのではないかなと感じています。そこで食事のこととか簡単な体操とか、お話しできて少しだけためになる、そんな楽しい場であれば来ると思うのです。そんな場をつくってあげれば、難しく考えなくても小さな場をいくつもつくれば、効果が表れるのではないかなと感じております。市にお願いしたいのは、素人の方でもいいのですが、やはり専門の方が来てくれれば、なおさら効果的になるのではないかなと思っています。人集めは私たち民生委員や自治会の人たちがお声掛けするので、これもやってみないとわからないのですが、そんなことができればいいかなと感じたところです。

市長：指導者の養成というのが出ておまして、予算の面が付け加えられますけれども、それは後から部長から話をさせていただきます。事前アンケートに日光福祉のまちづくり委員会でサロン活動を立ち上げましたというのがあるのですが、これは何か説明ありますか。

参加者：市内には福祉のまちづくり委員会が13地区ありますが、目標がサロン活動ということで、全体で統一した課題だと思えます。今市地区にかかわらず、13地区で共通の課題だと思うのです。まだ立ち上げたばかりなので、発表はまだしていない状況です。

健康福祉部長：ご提案ありがとうございます。自治会とか民生委員さんとかから、そういったご提案をいただければ、仕組みはできているものがあるので、ぜひ使っていただきたいと思えます。それが伝わってなかったりするというのが問題なのだと思うので、そこはよく対応していきたいと思えます。例えば、先ほどの資料5ページになりますが、各地域の取り組みの地域交流集いの場の事例で、清滝小学校の区域で日光貯筋アップ体操の集いというのをやっていて、足尾地域でも貯筋アップ体操というのを今度始めます。この貯筋アップというのは、まさにそういった筋力を貯蓄するという意味なのですが、増やすことはいず

れにしても、筋力を衰えないような体操をしましょうと、それでもってサロンをやりましょうといったような事例が出ています。こういったところに市の保健師や職員が関わったりして、そういう仕組みをつくっておりますので、なかなか浸透しないというところに何か問題があると思いますので、そこを考えなければいけないのと、もっと多様な仕組みがあれば使えるのかなと思いますので、そこは検討していきたいと思います。

参加者：ありがとうございます。どこへ申し込みをすればいいのですか。やりたいなと思ったときは、最初は模範的な人や指示してくれる人がいるわけですね。貯筋アップ体操をやることによって、筋力がアップするということですね。元気になるということなのでしょうから、簡単そうでいいですね。

健康福祉部長：市でも大丈夫ですし、社会福祉協議会でも地域包括支援センターでも大丈夫です。

参加者：話はよくわかりました。市のほうで出前講座をやっていると思いますが、自治会の中で検討して実施するとなると難しいところがあります。管理の問題とか人の問題とか、そういう人たちを公民館に詰めさせておいてやるということもあるし、そういう催しをやったとして、地域の人たちが参加するかというのも不安なところがありますので、それは自治会の中で検討しながらやっていきたいと思います。

参加者：地域包括システムの高齢者にやさしいまちづくりというのは、大変すばらしいことだと思うのですが、とかく高齢者というか対応する姿勢としては、元気な老人よりも弱者の老人をいかに救済していくかということが、大きな課題ではないかと思います。そういう観点からいきますと、先ほどから話が出ていますように、弱者の老人は具体的に言えば独居老人とか孤独感に浸っている、ふれあいのない方が多いわけですが、そのような方をどのように家から引っ張り出して、ふれあいの場をつくり参入させていくかというのが大きなテーマだと思うのです。そういう面で行きますと、今、行政のほうでも見廻り活動の中でやっておられると思うのですが、もう少しきめ細かくそういう面の対応についてシステムをつくっていただければいいかなと思います。単位としては、公民館で活動するいろいろなものを引っ張り出してくるかという場のつくり方もあると思いますし、現在やっているのですが、それでもなかなか出て来ないのです。そういう老人が多いわけですね。これからますます高齢化になっていくと、そういう老人の対応がもっとも必要だろうと思います。1対1で話しますと、心の癒しを求めている、話すと元気になってくるので、そういう人たちをどのように引っ張り出すかというのを、もう少し行政のほうと民生委員の方の手助け、各組長単位でそういうことを意識付けて、自分の組内だけは各家庭の状況をよく見つけてくださいという掛け声はかけているのです。もう少し見廻り制度の在り方について、行政の手助けがあればなおいいのではないかと感じております。私としては、元気な高齢者は積極的にどこへでも出てくるのですが、弱者の老人はお金の問題などで困っているのです。そういう人たちがこれからどんどん増えると思うので、その人たちをいかに助けて

いくつかという観点もお願いしたいと思います。

市長：見廻り活動に行政の支援というお話ですが、例えば、実際に自分たちでやられていて、どんなことを行政が支援すればいいかという考えはございますか。

参加者：具体的には、民生委員の方と打合せしながら、個人情報の問題もありますが、情報交換したり、また組長から状況を聞きながらというかたちでやっております。カラオケとかお花見会とかお茶会など、ふれあいの場はいろいろつくっているのですが、なかなか出て来ないので、情報交換しながら、そういう人たちがどういう状況であるのかというのは、現在やっている状況です。

健康福祉部長：出て来られる方はいいと思うのですが、出て来られない方はどうするかというのは、行政のほうでこういう手がありますからこうやっていきますというのはなかなか出てこないで、地域の方々がそういったことに問題意識を持っていただいて、自ら取り組んでいただきたいと思います。ただそれだけでは足りないから行政のほうではこういった面を支援してほしいというご提案をいただければ、そこでできることをどんどん取り組んでいきたいと思えます。そういう仕組みができるといいなと思うのですが、なかなか行政のほうで、こういうことをやればひきこもっている高齢の方が出てくるようになりますという解決策はなかなか難しいので、一緒に考えさせていただくという立ち位置でいたいと思えますので、ぜひそういったことはご提案いただければありがたいと思えますので、よろしくお願いたします。

参加者：1点関連することなのですが、見守り活動等については今市地区社会福祉協議会の中で、ふれあい訪問というかたちで年4回民生委員さんにご協力いただいてやっております。見守り活動に行く際には、記念品を持って訪問しているのですが、その記念品については、平成29年度はまちづくり提案制度の中で対応していただきましたのでお礼申し上げます。そういうかたちで見守り活動をやっているのですが、この回数を増やすことができないかということで検討しているのですが、民生委員さんの負担が大きくなるので、少しずつ充実させていきたいなという考えを持っております。

参加者：今の関連なのですが、私たち民生委員もいろいろと見廻りはしているのですが、なかなか目が届かない面もあって、その地域内、小さな自治会の中でも、また小さな地域というのをつくって、その地域で考えて支え合うことを考えていけたらいいなと思っているのですが、なかなかそれが実行するには難しく、今だに至っていないところですが、先ほど市長さんのお話の中で、私の考えていたことが全部入っておりますので、何もお話することがなくなりましたが、やはり地域の公民館を利用するというのも1つだと思うのですが、地域によっては公民館が遠い、そこまで歩いて行けるお年寄りばかりではないのです。なるべく数多くそういう場所へ行けば誰かがいる、お話しができる、そしてお友達ができ

てくる、そういう安らぎのある場所がいくつもあったらいいなと思っております。あと1つなのですが、先ほど部長のほうから買い物ツアーを実施しておりますという話がありました。そのことを詳しく聞きたいのですが、よろしいでしょうか。

地域振興部長：距離感の問題があるため、集まることのできる場所は、できるだけ身近なところであればいいと考えますが、現実的には自治公民館が一番利用し易いといえます。買い物ツアーは、現在のところ今市地域では取り組んではおりません。特に中山間地域と言われる中心地から遠い位置にある栗山地域、藤原地域の三依地区で実施しており、今年度から足尾地域で社会福祉協議会が主体に取り組みを始めることになっています。まず栗山については、「らくらく買い物お手伝い事業」ということで、基本月1回の実施となります。先ほど申しましたが、いわゆる買い物を主にとということでは、宅配や移動販売の事業者の方などから、食材の確保ができると考えます。しかし、先ほどのサロンの例のように、行き帰りの車中でののお楽しみとか、遠出をして大きな場所で自ら商品を手にとって買い物をするとか、時間的に難しいかも知れませんが、ついでにお医者さんに寄るとか、ちょっとした生きがいにつながることを目的にしています。具体的には、川俣、土呂部、湯西川の3コースで曜日を変えて実施します。藤原地域の三依地区に関しても、始めてから何年か経つのですが、地区内だけではなくて、交流という視点から、例えば三依から湯西川の道の駅を経由地にし、そこに栗山方面から来た方と合流し、一緒に交流しながら目的地に向かう「お買い物ツアー」にしてみようかとそんなことも始めようとしています。

市長：目的がなくてもそこに寄ってお茶を飲んだり、お話ができる方がおられる的な話が出ましたけれども、それを日光市がやるというのはなかなか難しいです。やはり地域の中でできれば、モデル的なものを1か所つくっていただいて、それらが広まっていくということになればいいと思っています。これは素晴らしい事業になると思います。そういうことによって、日光市は何ができるのかという話になると思います。最初からそれを市がやるというのはなかなか厳しいと思うので、そんな方向に行けばいいのかなと思います。

参加者：行政だけではなく私たち地元でも、何か小さいことをやれたらと思っています。

参加者：私が考えた高齢者の交流促進の場づくりというのは、ニコニコ本陣など営業時間前の駐車場を利用して、定期的に健康体操というものを開催したらいかがでしょうかということです。参加したい人が無料で気軽に参加できる場づくりが必要であると考えております。

市長：場所を提供するのは市ですが、駐車場の奥が広場になっていますから多分そこが使えると思います。

産業環境部長：ニコニコ本陣というお話になりましたので、私がお答えしたいと思います。そのような広場がございますし、雨天の場合は多目的ホールというのもございますので、公共施

設でございますのでご活用いただきたいと思います。

健康福祉部長：ご提案ありがとうございます。健康体操をいろいろなかたちで、小さい自治会単位でやっていくとかそういったこともあります。そういったものがいろいろなところでできると、それはそれですごくいいことだなと思います。市が全部段取りしてというのはなかなか難しい面があると思いますので、そういった動きがあればそれをうまく支援して一緒にやっていくことで取り組んでいきたいと思いますので、よろしくお願いします。

市長：チラシを置いたり、広報に載せたりということは、実施段階になれば市でできます。

参加者：このテーマ設定を1月にしたわけですが、そのときに高齢者等という等というのがついたのが1つ大きいので、取り上げていただきたいのですが、高齢者も当然いろいろ必要なのですが、子育て世代の方ですとか、障がい者または障がい者の家族、そういった方々の交流の場という意味付けも必要ではないかということで、1月のときに等という言葉が入りましたので、それを1つ付け加えさせていただきたいと思います。私が思うには、各公民館等も頑張っているのだと思うのですが、その中で解決できないことは、どうやって解決しようかという話になると思います。やはり来るのを待っているというよりは、その方が来られる状況をつくる、要は敷居の低い交流の場を創設するというのが、1つの具体的な策ではないかと思っております。そうすることによりまして、孤立ですとか孤独そういったものを未然に防ぐとか、あとは認知症関係であれば、地域包括支援センターに相談するとか、生活保護相談であれば市役所に行くとか、そういった部署に繋ぐ役割とかも重要なのではないかと思います。そうすることによって、最終的に健康寿命を延ばしたり、実際に医療を支えている家族の方の負担も減らすということができるのではないかと思います。これは地区ごとにやっている意味もあると思いますので、今市地区の良さ、特徴と言いますと、公的施設がたくさんあるということがありますので、金融機関、図書館、病院、人口もある程度集中している、それと先ほどから問題になっています中山間地域の方々の病院ですとか、それと今日は商店会連合会で来ていますので、市街地の活性化という意味でもぜひそういった方が来られるような敷居の低い交流の場をつくれればと思っております。その中で市にお願いできればということと言いますと、やはりその場を創設することを日光市として取り組んでいただければと思います。先ほど市長からもありましたように場所を増やす、アクセスポイントを増やすこともありますけれども、シンボリックなモデルみたいものをつくるというのもいいのではないかと思います。その中で財政面ではいろいろ問題はあると思いますが、ハードに関する初期投資は、ぜひ市を中心にお願いしたいと希望しています。また施設の責任者的な方を、市を中心に選ぶ、そして市民のほうは運営のサポートですとか、セミナーとか講座をやったりとか、何か体験させるとかそういったもののサポートをしていく、そんな仕組みづくりにチャレンジするのも1つではないかと思っておりますので、よろしくお願いします。

市 長：市がハード面での初期投資をするということは、場所をつくるということですか。

参加者：例えば、空き店舗とか空き家とかの利用でもいいと思います。新たな建物を建てなくても、その場をつくるための初期投資はある程度必要かと思います。

市 長：自治公民館や公共施設があると思いますが、そういうものではいかがですか。やはり新たなものが必要ですか。

参加者：必要というわけではないと思うのですが、本来のための公民館の機能が、今市であれば中央公民館なのですが、今そこに皆さんがアクセスしていたら、あまりこういう問題も起きない可能性もあるので、敷居を低くするためにそういった場所にするのも1つの案かなということですか。

市 長：できれば、こんなものもいいといった簡単な企画書みたいなものを考えていただき、そういう中で、市は何ができるのかなということ判断したいと思います。

参加者：消防団という立場上6ページの認知症対策のほうに興味がいってしまうのですが、日光市としてはかなりやってもらっているのが大変ありがたいのですが、日光応援隊というのがありますが、どういったものですか。

健康福祉部長：これは6月1日に発足したのですが、日光応援隊というのは認知症サポート医というドクターがいらっやいまして、その方と地域包括支援センターの専門職の方がチームになって、認知症の初期の段階で認知症の疑いのある人に関わるという仕組みなのですが、今までも地域包括支援センターに認知症の窓口があったのですが、そのときにドクターに繋ぐというのはなかなか難しかったのですが、サポート医の協力を得ることで、すぐに医療的な対応が取れるような仕組みができたというのがこれなのです。それなので相談機能自体はもともとあったのですが、それを早めに次の対策に取り組めるという仕組みができたというのがこのチームなのです。

参加者：あと、認知症の方で行方不明になってしまったということで、早期発見はやはり早い時間に連絡してもらいたいというのがあるのです。認知症の家族から聞くと、恥ずかしいとか、迷惑がかかるとかそういうことがあって、言いづらいというのがあるみたいなのです。その辺をサポートしていただければと思います。年間2、3回私も出ていますが、何人かの方が亡くなっていたり、いなくなっているの、そこはどのように考えているのかお聞かせください。

健康福祉部長：認知症対策は6ページに書いてあるとおりで、いろいろやっているのですが、例えば4つ目にある安心メールは連絡がいていると思うのですが、登録している方の携帯に

いくとか、その下のサポーター養成は、このオレンジリングがそうなのですが、認知症の周知を図って疑わしい人がいたら声をかけるとか、連絡を取り合うとかそういう仕組みをつくっているとか、日光安心見守りシールは、QRコードの入ったシールを貼って、それをかざすと情報がわかるということはやっているのですが、先ほど消防団としても活動いただいているということで、本当にありがとうございます。それでももっとよりよい方法とか、もっと工夫したほうが良いという点は出てくると思いますので、ぜひそういうご提案をいただければ、前向きに検討してまいりますのでよろしくをお願いします。

参加者：私どもの自治会は約 400 世帯と非常に大きなところなので、適正な自治会というのは 100 世帯前後が 1 番やりやすいのかなと思っています。高齢者の件に対しては、7つの町内に分かれていますので、その辺を細分化して取り組んでいこうかなと近年考えているのですが、私は 10 年も自治会長をやっていますので、何とか地域の人を把握できるような状態になりました。先ほどからご意見がいくつか出ていますが、男性の高齢者は特に出てきません。今 96 歳の男性の方 3 人を私に対応していますが、対応といっても民生委員さんほどの仕事ではないのですが話し相手です。その方たちをデイサービスに 1 回引っ張り出したのですが、3 回か 4 回行ったら、もう行きたくないという状況です。男性を引っ張り出すというのは、非常に大変なことだと思います。特にサロンとかいろいろな事業をやっていますが、なかなか公民館までは足が遠いとか、いくつかご意見があったとおりでと思います。それで市のほうでいろいろな予算を組んで、こういう事業をやったらこういう予算がありますという提案がありますが、私たちが取り組んでいこうとするのは、どういうもので細分化されたエリアで、高齢者を引き寄せるためには何がいかと考えていきたいと思うのですが、そこに関する予算はたいしたものではないと思いますが、こういう事業をやったら、こういう予算を出していただいけませんかというように、自治会から提案があってもいいのかなと思います。そんなことを考えてみました。

地域振興部長：ただいま事業提案と予算のお話をいただきましたが、実は昨年度から、九つの地域・地区ごとに設けたまちづくり検討委員会の中で、原則市が行う事業について、行政の目線ではない市民目線により、地域にとって優先的に必要なものの提案をいただいているところです。これについて、昨年度に生まれた提案を例示しますと、公衆トイレ等の扉に、荷物かけのフックがあるのですが、この位置がお子さんや高齢者の方には高過ぎるとの指摘があり、皆が使いやすいように低い位置に付けたらどうかという提案がありました。中々目のつけ難いところに着眼された提案として採択され、早速年度内に実施させていただきました。こうしたことを提案していただくことで、市民生活環境のほうも少しずつ良くなっていくのかなと捉えています。普段から全ての自治会における活動を把握するということは我々も困難なのですが、他の自治会で先進的な活動をしているというものを、できれば情報として提供できればと考えますため、先ほど申した市民活動支援センターの団体の取り組みと合わせて情報を整理し、自治会の方に機会を捉えてお知らせできればと考えております。